

III. ボランティア運営用システム基本モデル

ポイント

- 一般的な調達仕様書の構成に則って、業務要件、機能要件の定義例を記載しています。また、随所に「目的」、「ポイント」など検討に当たってのノウハウを記載しています。不要な要件は削除し、必要な要件は適宜カスタマイズするなどして、業務の整理、システム化の検討、調達仕様書作成の一助としてください。
- システムの設計・開発に先立ち、システムの要件を、本書を活用して可能な限り詳細に明確化することを推奨します。特に開発方式として「ウォーターフォール型開発」を採用する場合には、要件の不備が追加コストの発生やリリース遅延に繋がる場合があるため、事前に要件を明確化することが重要となります。事前に要件の詳細な明確化が困難な場合には、開発方式として「プロトタイピング型開発」、「アジャイル型開発」、「スパイラル型開発」などを採用するなどの工夫が必要となります。
 - ※ ウォーターフォール型開発
要件定義、基本設計、詳細設計、実装、テストなどの工程を、上流工程から下流工程へと順に実施していく開発方式です。スケジュール管理が容易といったメリットがあります。ただし、工程の後戻りができない（後戻りする場合には以降の工程の再実施が必要である）ため、後工程での仕様変更への対応が容易ではないといったデメリットがあります。
 - ※ プロトタイピング型開発
実際に動作するプロトタイプを早期に作成し、そこから修正を加えていく開発方式です。事前に要件が明確になっていない場合にも比較的容易に対応が可能といったメリットがあります。ただし、スケジュール管理が容易ではない、プロトタイプの構築や修正に時間を要するため大規模システムの開発などには向かない、修正が多くなると期間・コストが増加するといったデメリットがあります。
 - ※ アジャイル型開発
小さな機能単位ごとに設計、実装、テストを繰り返していく開発方式です。小さな機能単位ごとに開発していくため、優先度の高い機能を早期にリリース可能となり、仕様変更にも対応しやすいといったメリットがあります。ただし、全体のスケジュール管理が容易ではないといったデメリットがあります。
 - ※ スパイラル型開発
設計、実装、テストの一連の工程を繰り返し実施する開発方式です。開発の計画や仕様の変更比較的柔軟に対応が可能といったメリットがあります。ただし、繰り返しの回数が多くなると期間・コストが増大するといったデメリットがあります。
- 要件定義にあたって、現場担当者等にも十分にヒアリングを行い、意見・要望などの収集を行うことは重要ですが、ヒアリングであがった意見・要望をそのまま反映していくと、要件が際限なく肥大化し、柔軟性のないシステムになる恐れもあるため、事業の目的や方針、費用対効果なども考慮し、大所高所から要件の検討を行う必要があります。

1. 用語の定義

目的

対象とするボランティア事業に特有の用語や、文書内では限定的な意味で使用する用語について定義を行います。用語を厳密に定義することにより、要件の認識齟齬を防止します。

本書における用語の定義を表 2 に示す。

表 2 用語の定義

No.	用語	内容
1	事業運営者	対象とするボランティア事業（以下、「本ボランティア事業」という。）において、実際の運営業務を行う者を示す。
2	ボランティア	本ボランティア事業において、ボランティア活動を行う者を示す。
3	応募者	本ボランティア事業において、ボランティア募集に対して応募を行う者を示す。
4	・・・	・・・・・・
5	・・・	・・・・・・

ポイント

- 一般的な用語であっても、文書内では限定的な意味で使用する場合などには、ここで定義しておく必要があります。